

(様式6-A) A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

佐野宏和氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題目

Effects of Statin Therapy on Cardiac Sympathetic Nerve Activity and Left Ventricular Remodeling in Patients With Chronic Heart Failure : A Propensity Score-Matched Analysis

(慢性心不全患者の心臓交感神経活性および左室リモデリングに対するスタチン療法の効果 : 傾向スコアマッチング解析)

Medicine (Baltimore). 2014;93(27):e214

Hirokazu Sano, Shu Kasama, Shinichiro Fujimoto, Takuji Toyama, Noriaki Takama, Norimichi Koitabashi, Shuichi Ichikawa, Yasuyuki Suzuki, Naoya Matsumoto, Yuichi Sato, and Masahiko Kurabayashi.

論文の要旨及び判定理由

心臓交感神経活性と左室リモデリングに対するスタチン療法の効果について、¹²³I-MIBG心筋シンチグラフィを用いて評価した報告である。急性非代償性心不全で入院した、左室駆出率 45%未満の慢性心不全患者を対象とした。退院直前と退院6か月後に¹²³I-MIBG心筋シンチグラフィと心エコー検査を行った。スタチン療法を開始した群と開始しなかった群を比較するために、傾向スコアマッチング法を用いた。スタチン群では非スタチン群と比し、¹²³I-MIBG心筋シンチグラフィの各パラメータの変化は改善し、心エコー検査の左室拡張末期容積および収縮末期容積が縮小した。さらにスタチン群では¹²³I-MIBG心筋シンチグラフィ所見の変化と、左室拡張末期容積の変化の間に有意な相関性を認めた。また左室収縮末期容積の変化との間にも有意な相関性を認めた。一方、非スタチン群ではこれらの相関性は認められなかった。スタチン療法は慢性心不全患者において、心臓交感神経活性を改善するだけでなく、左室容積を減少させる、すなわち左室リモデリングを予防するものと考えられた。

以上から、本研究は慢性心不全に対するスタチン治療の新たな有効性を示した研究で、博士(医学)の学位に値するものと判定した。

(平成29年2月20日)

審査委員

主査	群馬大学教授 (医学系研究科)		
	臨床検査医学分野担任	村上正巳	印
副査	群馬大学教授 (医学系研究科)		
	分子細胞生物学分野担任	石崎泰樹	印
副査	群馬大学教授 (医学系研究科)		
	脳神経外科学分野担任	好本裕平	印